

雑誌『建築世界』の創刊期における署名記事と巻頭言の展開について 建築世界社の出版活動研究 1

On Signed Articles and Prefatory Notes of the Architectural Magazine *KENCHIKU-SEKAI* in its Founding Period; Studies on Architectural Publisher Kenchiku-Sekai-Sha, 1

○大川三雄¹, 川嶋勝², 矢代眞己², 田所辰之助¹

* Mitsuo Ohkawa¹, Masaru Kawashima², Masaki Yashiro², Shinnosuke Tadokoro¹

1. はじめに

建築誌に関する史的研究は、従来はモダニズム導入との関係性が軸となり、とくに 1920 年代以降の建築運動や建築批評の趨勢を重視した論考が多い¹⁾。

明治末に創刊された建築誌『建築世界』(1907~44、図 1) は、わが国初の、かつ戦前期最長の商業誌として名高い。これまで同誌は中堅技術者向けの実務的な内容と評され²⁾、雑誌としての批評性や先鋭性という観点では評価の俎上に乗せられてこなかった。しかし、創刊 5 年目には「建築と批評」を表題に冠した記事もみられる。本稿では最初の 5 年間を「創刊期」と仮定し、その動静について、既往研究の評価を検証しながら、署名記事と巻頭言の展開を中心に考察する。

2. 河東義之による 2 周年「記念号」への着目

わが国の建築誌の端を発した『建築雑誌』(1887~) は、造家学会(現日本建築学会)の会員に頒布した機関誌であった。対して市販の商業誌『建築世界』は「戦前派には大いに愛読された」³⁾と認知され、これまで何度となく史的研究が試みられてきた⁴⁾。

その嚆矢となった 1974 年の河東義之の論考は、建築誌の文献紹介欄という紙幅の制限ゆえか、1907 年 7 月の創刊経緯と 1909 年 7 月の 2 周年「記念号」にのみ焦点があてられた⁵⁾。創刊当初の内容の脆弱さは同誌編集局内でも自覚されており、河東は 2 周年記念号をもって商業誌としての地位を確立したと評している。それは編集局の記した「多年本誌が予期した意識の実現」が、判型の大型化と増頁にも表れていることを河東は指摘した。そして同号の目次を掲げ、執筆者に「建築界の大家」が「顔をそろえ」ることで「押しも押されぬ一流雑誌に発展した」と結論づけた。こうした創刊当初の動静への指摘はその後検証されておらず、同誌全体の史的评价も定まっているとはいえない。



図 1 『建築世界』創刊号表紙

3. 宮内嘉久による「建築批評・評論の徴表」

『建築世界』創刊期の情勢の概括として、わが国の建築誌研究の基底をなした宮内嘉久の論文「近代日本の建築イデオロギー：ジャーナリズムを通して」(1949)を検討する⁶⁾。宮内は「建築ジャーナリズムの開花」を 1920 年代とし、伊藤清造の論考「建築のプロレタリアリズム」(建築新潮、1926 年 7、8 月号)に「歴史的価値」を与えた。その前兆となる 1910 年代に「建築論的思考の発生」を指摘し、「建築批評・評論の徴表」となる論考を列挙した(表 1)。帝国議会議事堂をめぐる様式論争に端緒を見出しつつ、岡田信一郎を「建築評論の問題をはじめ意識的に採りあげた」と評し、野田俊彦の論文を「唯物論的建築思考の出発点」と位置づけた。

こうしたなかで『建築世界』誌の記事については、「建築と批評及建築家と批評家」(1911 年 2 月号)が唯一挙げられた。これは本稿冒頭で「批評」の表題を指摘した記事であり、編集局の巻頭言である。一方で、同誌の存在について宮内は「いわゆる雑誌ジャーナリズムの建築における端緒」と記すにとどまっている。

4. 『建築世界』における署名記事の出現

『建築世界』創刊号は「内容の如きも大に粗雑と不体裁とを究め慚愧」する謝罪が奥付頁に掲げられたほどで、その年の記事の大半が無署名であった。しかし、翌 1908 年には辰野金吾ら錚々たる顔ぶれの署名記事が登場しはじめている。1 周年直前の同年 6 月号には、図版の充実や増頁などが社告でうたわれた。

そこで創刊期の展開をたどるために、主な署名記事と「主張」欄を抽出する(表 2)。同誌は多種の記事で構成され、それぞれに「学苑」「問答」などの名称が付された。とくに「主張」欄は、編集局の巻頭言として 1909 年 7 月号から 1939 年 12 月号まで継続したことからも、その報道姿勢を最もよく示すものと考えられる。

署名記事で際立つのは、議事堂の様式論争に関するもので、辰野や伊東忠太らが入れ替わりで登場してい

1: 日大理工・教員・建築 2: 日大短大・教員・建築

表 1 宮内嘉久による「建築批評・評論の徴表」⁷⁾

- ・1909.01 伊東忠太「建築進化の原則より見たる
我国建築の前途」、建築雑誌
- ・1909.07 関野貞「日本建築の将来」、同上
- ・1910.04 岡田信一郎「建築と評論」、同上
- ・1910.04 岡田信一郎「建築と現代思潮」、同上
- ・1910.06, 08 正員討論会「我国将来の建築様式を
如何にすべきや」、同上
- ・1911.02 ^{ママ}巻頭言「建築と批評及建築家と批評家」、建築世界
- ・1911.05 黒田鵬心「建築批評の標準」、建築雑誌
- ・1915.09 岡田信一郎「社会改良家としての建築家」、同上
- ・1915.10 野田俊彦「建築非芸術論」、同上
- ・1917.12 野田俊彦：「所謂日本趣味を難ず」、同上
- ・1918.12 秋水生「建築批評家の出蘆を望む」、建築と社会

る。宮内の指摘した「建築批評・評論の徴表」が建築学会誌と同様のテーマで同時期に、商業誌『建築世界』で展開していたことが認められる。

5. 「主張」欄の設立と展開

編集局の意思を最もよく伝える巻頭言は、最初期の名称と内容に変動がみられる。創刊号の「発刊の辞」は「社説」とされ、日露戦争後の「陸海軍の大拡張に伴ふ兵營の建築」や「市区改正に要する改築」の機運に乗ろうとする旨がうたわれた。翌 1 周年の「記念号発刊の辞」は「社辞」とされ、雑誌刊行の「実質と声価」が「予想以上に発達を遂げ得たる」ことへの「諸大家の指導と懇篤なる愛読者」に謝意が示されたが、建築に関する具体的な記述はみられない。

翌年の 2 周年記念号で名称が「主張」欄に固定されたが、表題は「記念号発刊の日に臨み」と前年同様である。しかし本文の調子は一変し、建築をめぐる情勢が積極的に論じられた。冒頭から「現時の土木建築界は、誠に和洋両様式の過渡時代也。思想混乱の粉擾時代也」とつづられ、「各様式乱れ」た「不幸なる国民」を嘆く。翌 1910 年 8 月号の表題は「方針を誤れる我建築界」と強い語調となり、「日本の建築が世界一般から見て後れて居ることは已に国民一般に自覚する様になつて是非共大改革」をと訴えた。これらには「国民」の用語が繰り返しみられる。そして翌年に先述の論考「建築と批評及建築家と批評家」が登場した。

6. まとめ

『建築世界』誌は、既往研究の評価よりも早い段階で誌面が充実していく形跡を指摘でき、創刊翌年から有

表 2 『建築世界』創刊期の主な署名記事と「主張」欄

- ・1908.03 手島精一 説林「職工教育」
- ・1908.05 辰野金吾、塚本清、伊東忠太
説林「議院建築の方法」
- ・1908.10-11 三橋四郎 説話界「家屋建築改良の急」
- ・1908.11 中村達太郎 説話界「青年建築家に望む」
- ・1909.05 佐野利器 説話界「震度及び破壊力」
- ・1909.07 主張「記念号発刊の日に臨み」
- ・1909.08-09 武田五一
評論「日本住宅建築に改良の余地ありや」
- ・1909.09-10 主張「火災と震災と」
- ・1909.10 安部磯雄 評論「東京市区改正意見」
- ・1910.01 辰野金吾 評論「消極的防火に関する意見」
- ・1910.02-04 主張「如何にして建築界を興隆せしむ可き乎」
- ・1910.02-05 伊東忠太 評論
「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」
- ・1910.04 辰野金吾 評論「帝国議院建築準備に関する意見書」
- ・1910.07 大隈重信 評論「技師と職工に望む」
- ・1910.08-10 主張「方針を誤れる我建築界」
- ・1910.09-11 伊東忠太
評論「再び日本建築将来のスタイルに就て」
- ・1910.11-12 主張「日本が要する建築家」
- ・1911.02-04 主張「建築と批評及建築家と批評家」
- ・1911.05 妻木頼黄 主張「吉原再築に対する予の希望」
- ・1911.06 主張「建築と彫刻の関係」

力建築家による署名記事が増えていった。しかし商業誌としての地位が確立されたのは、やはり 3 年目とみるのが妥当と考えられる。そこには、建築家たちの様式論争の興隆とともに現れた、同誌編集局の批評精神の萌芽が「主張」欄に見出せるのであり、「国民」にのつての建築の姿を問うような意識も認められる。

注

- 1) 宮内嘉久「近代日本の建築イデオロギー：ジャーナリズムを通して」（東京大学卒業論文、1949、宮内『少数派建築論』所収、井上書院、1974）が嚆矢となり、日本科学史学会編（責任編集：村松貞次郎）『日本科学技術史大系 第 17 巻・建築技術』（第一法規出版、1964）と日本建築学会編『近代日本建築学発達史』（丸善、1972）の建築論や建築運動の項に、宮内と同様の叙述と引用文献が踏襲された。それは西山如三の史観（「建築家のための建築小史」国際建築、1933 年 8 月～1934 年 1 月号など）に色濃く影響されている。
- 2) たとえば中谷礼仁ほか『近世建築論集』、p81、アセテート、2005
- 3) 村松貞次郎『日本建築家山脈』、p.228、鹿島研究所出版会、1965
- 4) たとえば渡辺未央「雑誌『建築世界』（1907～1944）を中心とする「建築世界社」の活動に関する史的研究」平成 17 年度日本大学大学院理工学研究科修士論文、2006
- 5) 河東義之「文献《建築世界》」、都市住宅、1974 年 7 月号、pp.53-54
- 6) 前掲 1) 宮内（1949） 7) 前掲 1) 宮内（1974）、p.263